

辛島家のひとびと
近現代

第十一代・彝蔵から第十四代・知己と長女・信子まで



▲ 第十一代 彝蔵

略歴

明治三年（一八七〇）

熊本藩小銃隊指揮士

重士隊、予備兵

同 四年（一八七二）

藩兵解体により免職

同 十年（一八七七）

西南戦争

熊本隊第九番隊分隊長

江戸から明治へ

彝蔵は、幕末の嘉永二年（一八四九）四月二十七日、第十代・多喜次の長男として生まれました。時習館居寮生となり、文武ともに励みます。

その後、熊本藩の小銃隊指揮士や予備兵になりましたが、明治四年（一八七二）の明治政府による廃藩置県に伴い、同年九月、藩兵解体のため免職となりました。

明治十年（一八七七）の西南戦争では熊本隊に参加、第九番小隊の分隊長となります。

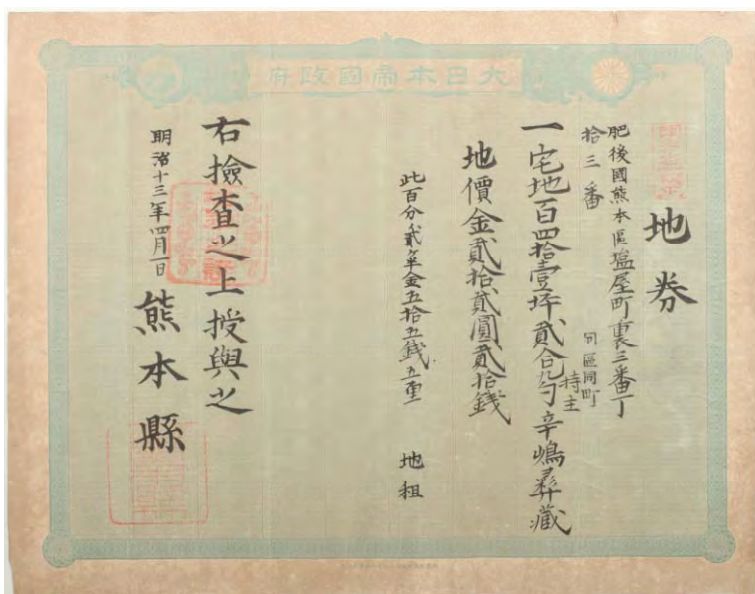
戦争終結後、隊を指揮し政府軍に抵抗したことから裁判で懲役一年となったため、辛島家の家督は弟の格が相続することになりました。その後は上益城郡書記や熊本県属などを務めました。

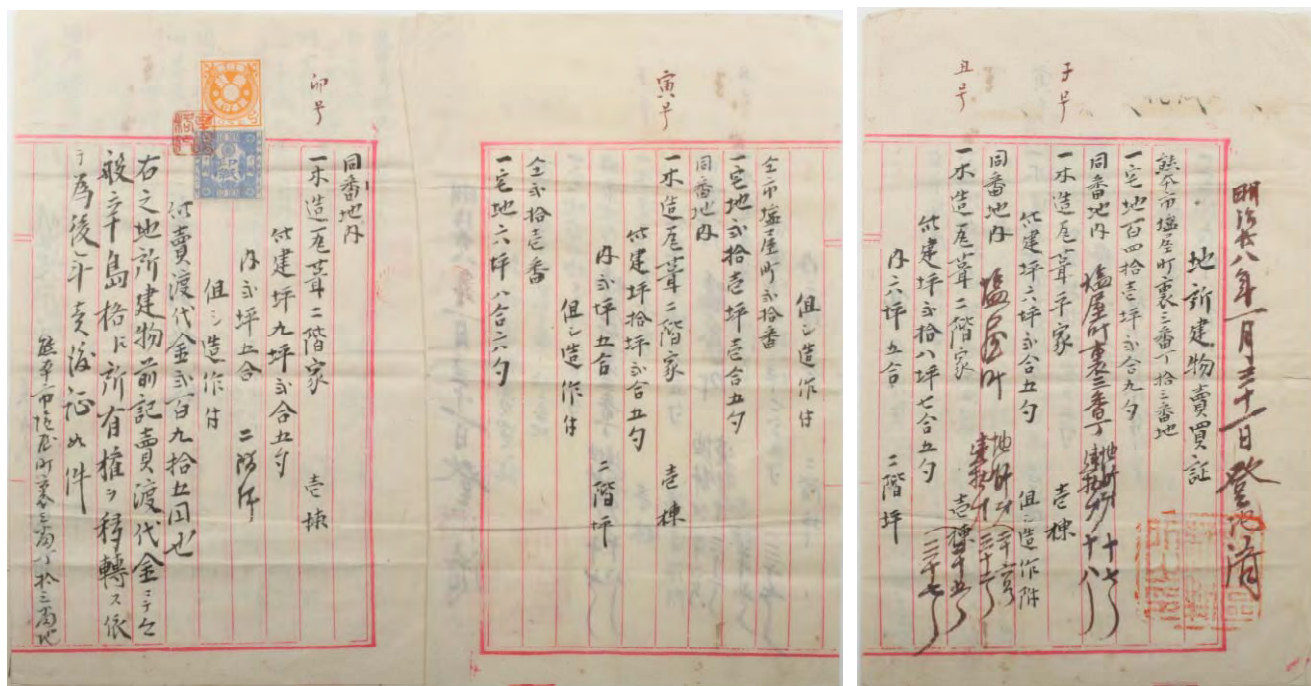
▲ 地租改正で交付された証券

27 地券 塩屋町裏三番丁拾三番

明治十三年（一八八〇）四月一日

辛島家は江戸時代から塩屋町（現在の熊本市中央区新町）に居を構えていた。本資料は塩屋町裏三番丁十三番地の地券で、持主は彝蔵となっている。





▲塩屋町辛島家の土地と家屋

28 地所建物売買証

明治二十八年（一八九五）一月二十九日

塩屋町裏三番丁十三番地と、塩屋町二十番地・二十一番地の宅地と家屋について、葬蔵から弟の格に所有権が移転されたことを示す証書で、家屋ごとの坪数を示す図が添付されている。



（付図）

第十二代 格



格は嘉永七年（一八五四）五月十日に生まれました。幼少より文武に優れ、明治十年（一八七七）の西南戦争では、兄・彝蔵とともに熊本隊に参加、その後家督を相続しました。郡長などを経て熊本市長となり三期にわたり約十六年務めました。

略歴

明治 十二年（一八七九）	熊本県師範学校副監事
同 十三年（一八八〇）	熊本県師範学校教授方兼務
同 十四年（一八八一）	上益城郡書記、上益城郡下益城郡書記
同 十八年（一八八五）	熊本県御用係、熊本県警部
同 二十一年（一八八八）	熊本県属
同 二十六年（一八九三）	八代羣北郡長
同 二十八年（一八九五）	八代郡長
同 三十年（一八九七）	熊本市長（第一期）
同 三十六年（一九〇三）	熊本市長（第二期）
同 四十二年（一九〇九）	熊本市長（第三期）
大正 二年（一九一三）	熊本市長病氣退職

（五月二十二日死去 享年六十歳）

格の市政

格は熊本市長として、陸軍山崎練兵場の移転、市役所の庶務整理、市有基本財産の造成など、市政の確立に努めました。市長三期目の明治四十三年（一九一〇）に著した『熊本第一期改善私議』では、「上下水道及び公園等の如きは都市の必要条件として此等整備するなくんば都市の名称あるも其實質なき」と、熊本市が近代都市であるために相応しい設備を早急に整備しなければならぬとし、その必要性を訴えました。この都市設備の改善は、後の市政まで引き継がれました。

思慮周匝、練達の才

格について、「職二当テ清廉事二処シテ公平、思慮周匝ニシテ運ラスニ練達ノ才ヲ以テシ為サザルアリ為セバ必ズ其成ヲ見ザルナシ」（『辛島熊本市長の功績』山田珠一序文 大正二年）と物事を隅々まで考慮し、行つべき事を見極めて職務にあたる手腕が評価されています。

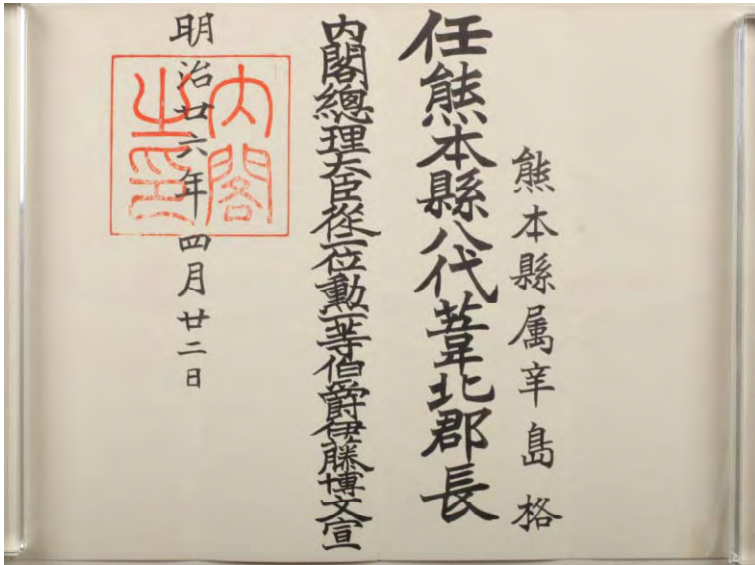
また、「人に接する温和、事を視る明敏、その施設する所、遠大に従い速攻を求めず」と長い目で見て物事を進める姿勢が評価され、「熊本市に於ける当時未成の大事業数件も、考慮已に熟し、設計已に成りたりしに、不幸病を獲て後任に譲り他日の完成を期したり」（宇野東風編『丁丑感旧録』昭和二年）と、任期半ばでの退職は惜しまれるものでした。

▲地方自治の基盤づくり

29 辛島格八代葦北郡長辞令

明治二十六年（一八九三）四月二十二日

第十二代・格の八代葦北郡長就任の辞令。明治二十六年四月二十二日付で内閣総理大臣・伊藤博文から出されている。また、明治二十八年（一八九五）からは八代郡長となった。格は郡長として、役所の事務整理や、郡有の基本財産となる干拓地造成を計画するなど、地方自治基盤の形成を図った。



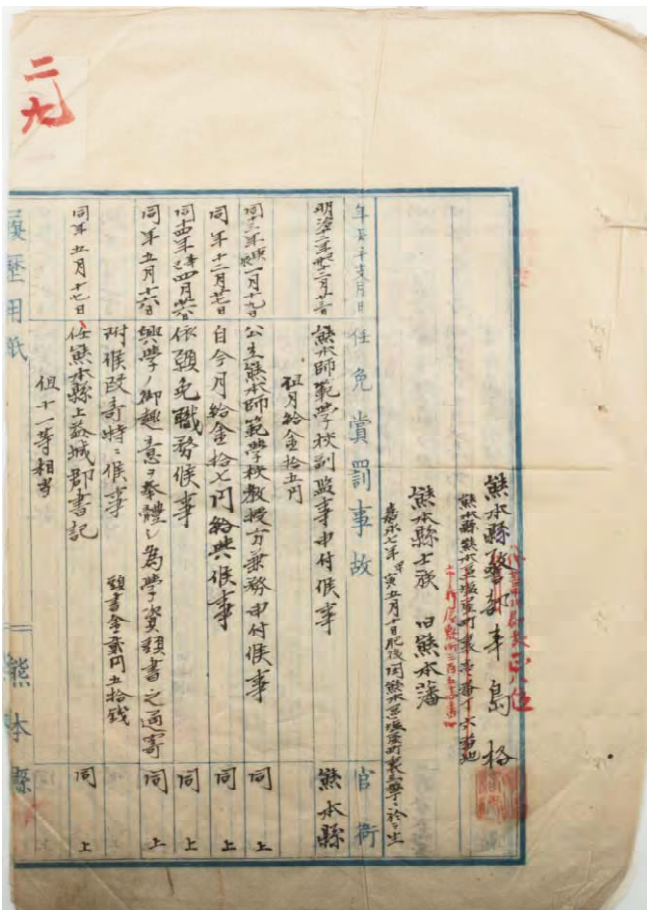
▲八代葦北郡長在任時までの履歴

30 辛島格履歴書

明治十八年（一八八五）～二十七年（一八九四）

明治十二年（一八七九）に熊本師範学校副監事となつてから八代葦北郡長在任時の明治二十七年（一八九四）までの履歴が記される。

熊本県警部（明治十八年）時に作成された履歴書に八代葦北郡長までの履歴が書き足されている。



▲第三代熊本市長に就任

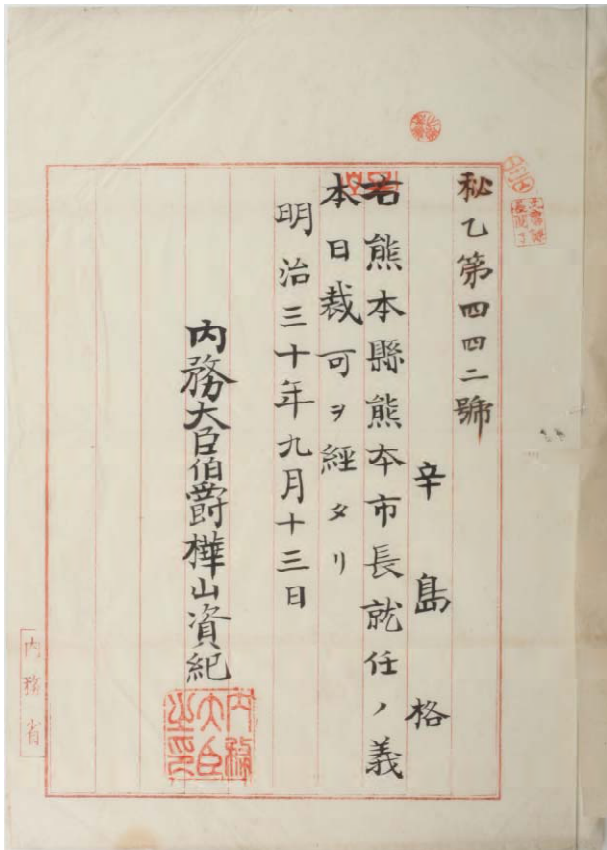
31 辛島格熊本市長就任裁可通知書（第一期）

明治三十年（一八九七）九月十三日

格の熊本市長就任を許可する通知書。明治三十年九月十三日付で内務大臣・樺山資紀から出されている。

当時の市長は、市会が推薦した候補者から天皇の裁可を経て内務大臣が選任して決定した。

格は大正二年（一九一三）まで三期にわたって約十六年市長を務めた。



▲「九州首府」熊本の近代都市計画

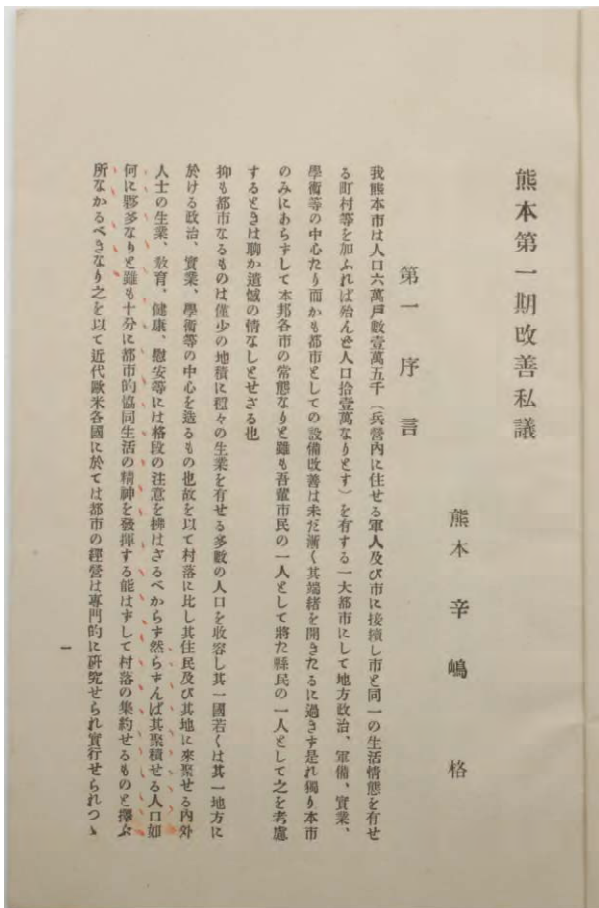
32 熊本第一期改善私議

明治四十三年（一九一〇）

格が市長三期目の明治四十三年に、熊本市の都市設備の改善の必要を訴えるため著したもので、九州の首府を担うためには近代都市としての設備が早急に必要であることを述べている。

明治天皇即位五十年に合わせて、上水道・下水道・公会堂・公園・市庁舎及び市会議事堂設置の五事業を、明治四十五年から四十九年の五カ年の間に完成させることを目標とし、事業費概算や捻出方法を出している。

しかしながら、これらの事業のうち上下水道の設置などは、大正・昭和の市政へと引き継がれて完成に至った。



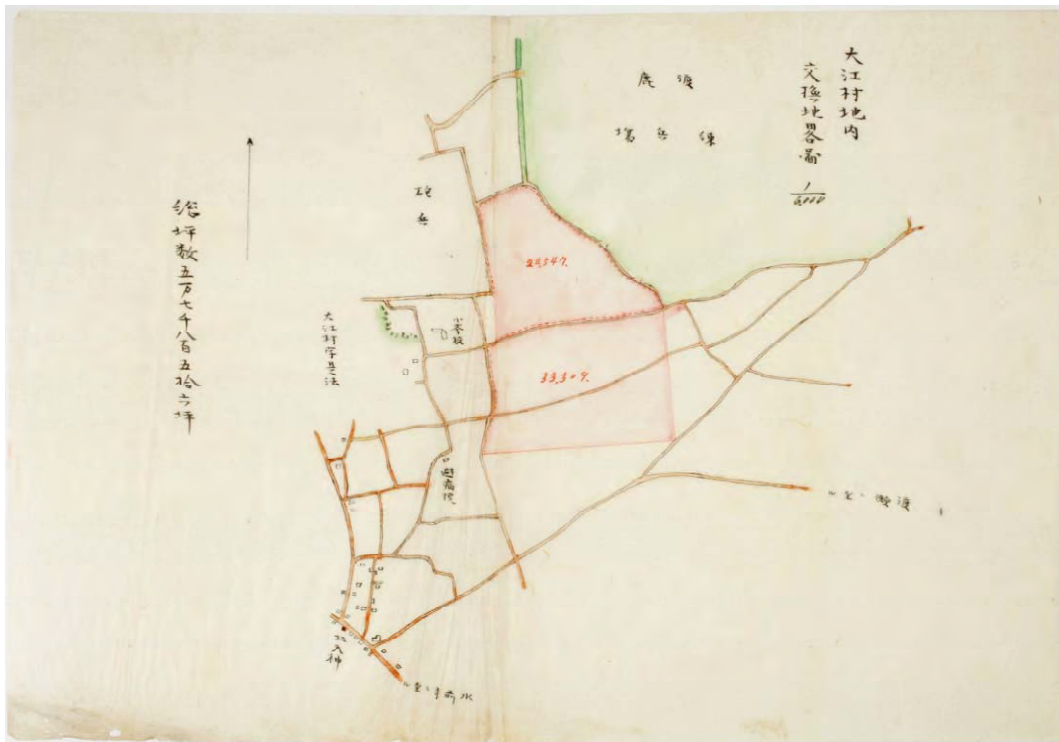
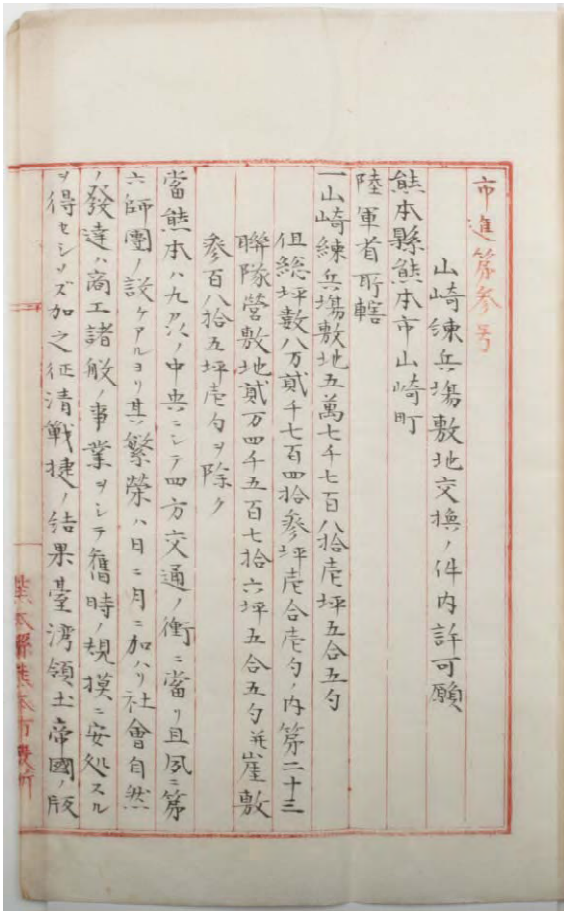
▲山崎練兵場の移転

33 山崎練兵場敷地交換内許可願

明治三十一年（一八九八）一月六日

明治時代の熊本市は陸軍第六師団が置かれ、「軍都」として発展していた。しかし、山崎町の陸軍練兵場が、熊本市の商業の中心地であった古町と坪井町を分断し商業経済の発展を妨げていることが問題となり、大江村の渡鹿練兵場隣接地への移転が検討された。

本資料は、熊本市長・辛島格から熊本県知事・大浦兼武に出されたもので、山崎練兵場敷地の内、第二十三聯隊の敷地を除いた五万七千七百八十一坪五合五勺（野球場約十四面分）の交換を願っている。



（付図：大江村地内交換地略図）

▲陸軍省との交渉

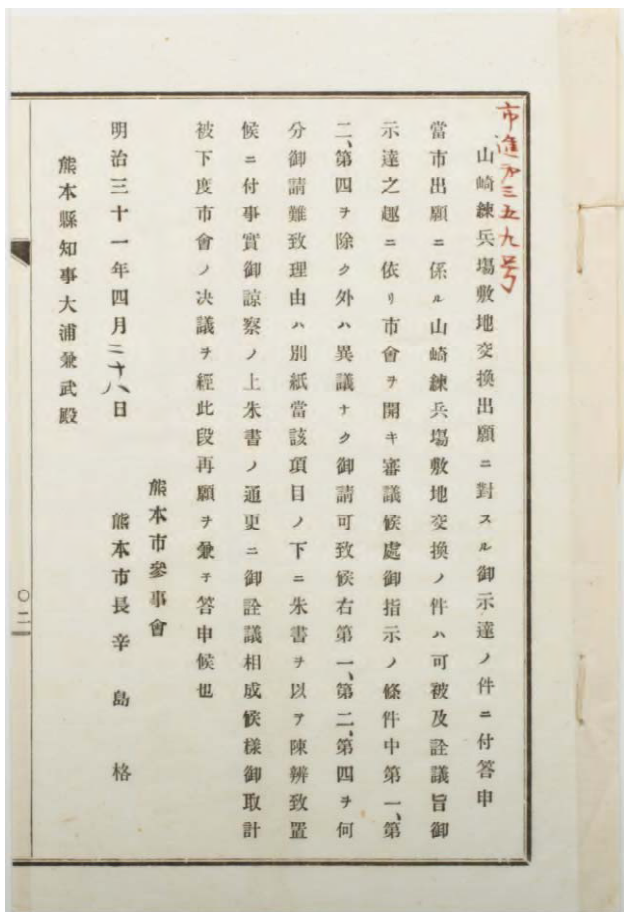
34

山崎練兵場敷地交換出願ニ対スル御示達ノ件ニ付答申

明治三十一年（二八九八）四月二十八日

山崎練兵場の移転案は、熊本県から陸軍省に上申された。陸軍省側も軍備拡張のため渡鹿^{とろく}練兵場がある大江村への移転に合意し、その際、移転工事の期間や費用について十八条の条件が出された。

本資料は、陸軍省から出された移転条件に対する、熊本市から県に出された答申で、市会で異議のあつた項目についての意見が記されている。その後、第六師団と交渉が行われ、移転条件の修正等が行われた後、明治三十一年十二月に正式に移転認可が下りた。



(付図：山崎練兵場交換敷地見取図)

▲山崎練兵場跡地につくられた新市街

35 熊本市山崎新市街町名地番設定図

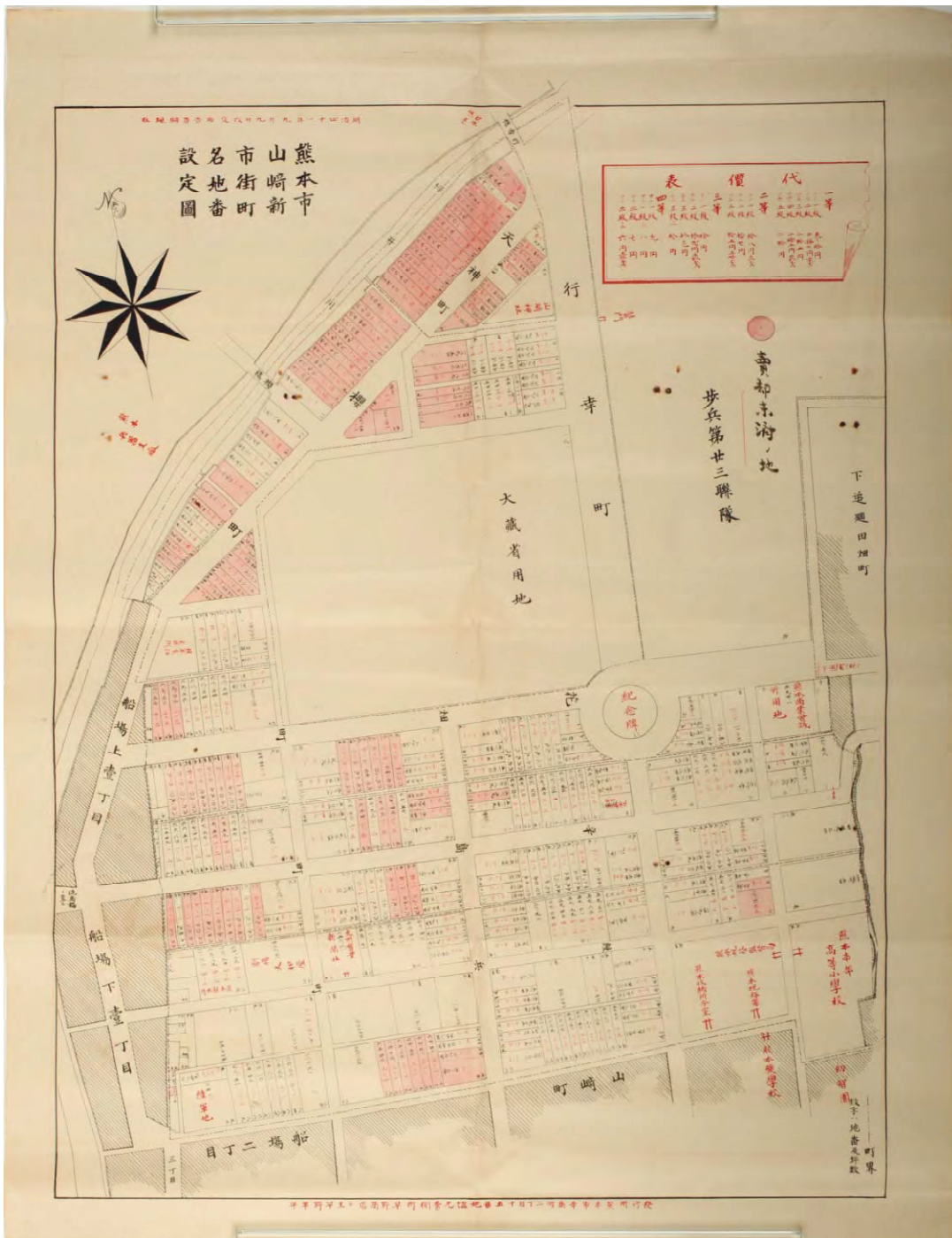
明治四十一年（一九〇八）

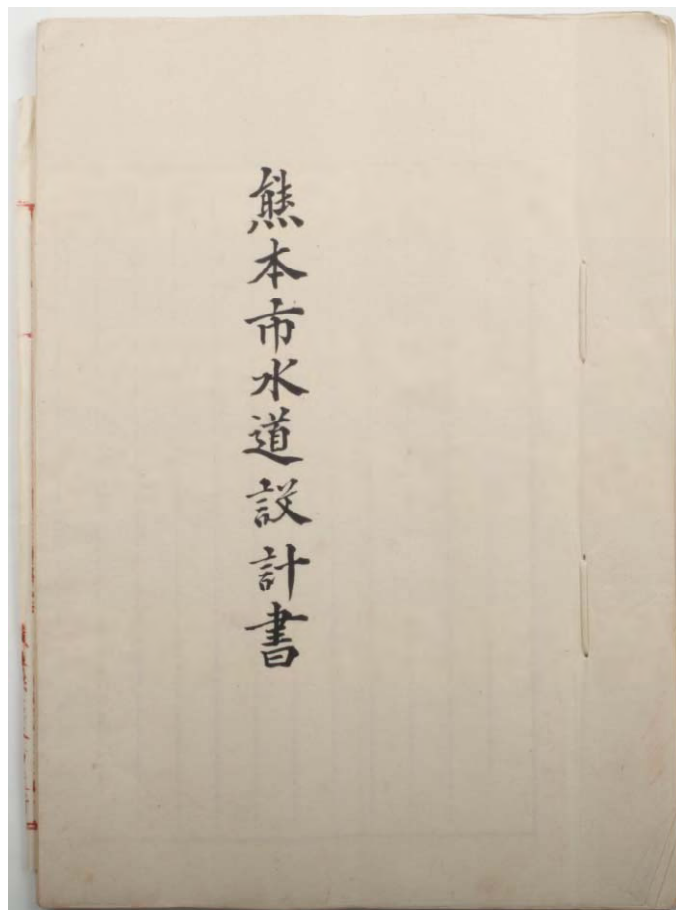
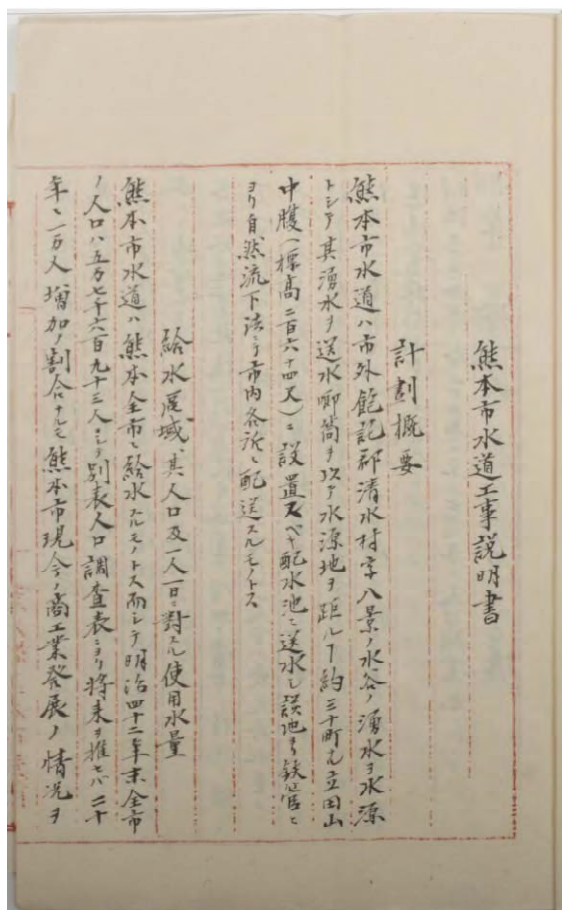
山崎練兵場の移転後、跡地には新市街が造成され、明治三十三年（一九〇〇）から土地が一般に払い下げられた。

明治三十八年（一九〇五）に大蔵省へ煙草専売局用地として売却後、土地購入希望者が増加し、日清戦争を記念して作られた征清記念碑（現在の辛島公園、本図中には「記念牌」とある）附近に、映画館を中心とした繁華街が形成されていった。

明治四十一年に新たな町名地番が設定され、**行幸町・天神町・桜町・花畑町・練兵町**、移転時の格の功績を称えて**辛島町**の町名が付けられた。

本図は新しい町名地番と地価を示すもので、図中には「売却未済ノ地」が赤で彩色されている。





▲熊本市の水道敷設計画

36 熊本市水道設計書

大正時代

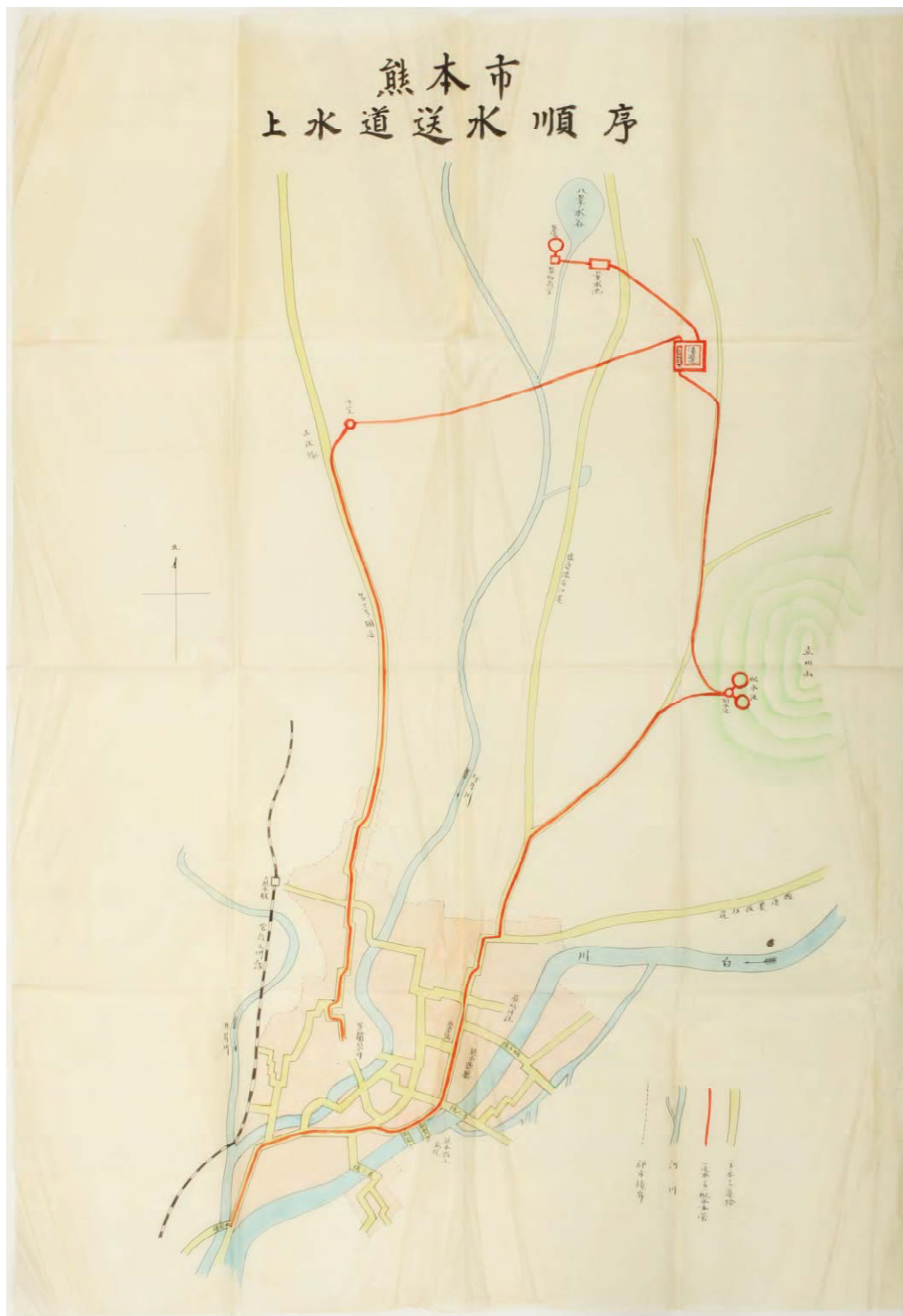
本資料は、清水村八景水谷を水源地とする水道敷設計画に基づき、計画概要や、明治二十三年（一八九〇）から同四十二年（一九〇九）まで二十年間の給水域の人口と増減、使用水量、水源の水質・水量などが記され、工事費用が出されている。

格は『熊本第一期改善私議』において、「上水道は衛生上防火上都市として其設備を欠くべからざるもの」として上水道の必要を説いた。

その後、水道設置に向けた調査が行われ、大正二年（一九一三）に水源地を飽託郡清水村八景水谷とし、配水地を立田山に設置する計画が出された。

しかし坪井川下流域の灌漑用水への影響の心配などから反対運動が起きたため計画は難航し、明治四十三年（一九一〇）の格の上水道敷設計画面から十四年かけて、大正十三年（一九二四）によりやく完成に至った。

熊本市 上水道送水順序



▲熊本市上水道の送水経路図

37 熊本市上水道送水順序

くまもとしじょうすいどうそうすいじゆんじよ

明治時代末〜大正時代

本図では、八景水谷を水源地とし、送水ポンプで配水地の立田山に送水して自然流下（高台からの高低差を利用した配水方法）で市内に配水される上水道の送水経路が示される。

格の市政において計画され、その後の市政にも引き継がれて完成に至ったこの上水道は、現在も熊本市民の生活を支えている。



△格が所有していた帽子

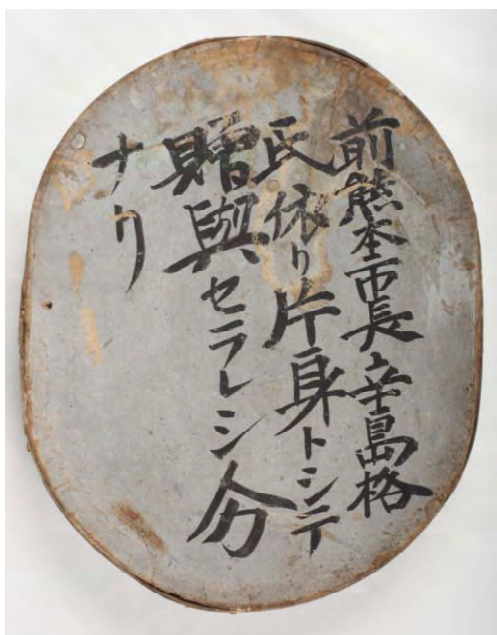
38 シルクハット

明治時代

シルクハットは、明治時代に日本に広がった洋装の正式礼装用帽子。

本資料は、市区改正事務所会計係長や市収入役として、格のもとで山崎練兵場移転の市区改正事業の職務を担った岩成武範^{いわなりたけのり}へ、格の死去後に形見分けとして贈られたものである。

帽子内側には「辛島格」の押印がある。また、収納されていた箱には、「前熊本市長辛島格氏依り片身トシテ贈与セラレシ分ナリ」と書かれている。



(箱上蓋)

第十三代 昌雄



昌雄は明治十年（一八七七）十月十二日、第十一代・彝蔵の長男として生まれました。第十二代・格から家を相続します。海軍士官となり、明治三十七年（一九〇四）の日露戦争に参加しました。後には長崎市助役を務めました。

軍艦からの便り

昌雄は海軍士官として軍艦常磐や明石、浪速に乗艦、寄港した横浜・神戸港・大連・韓国仁川など各地から、従兄弟の知己へしばしば便りを送っています。明治四十一年（一九〇八）の葉書では、佐世保に入港の際に帰熊し「熊本も別に関わりたる事もなく」「久振に故郷の桜花を眺め候」と、そのころ東京にいた知己に故郷熊本の様子を伝えています。



こぼれ話② ～知己命名の庭園～

熊本城の新一丁目御門前には、熊本藩の政令を掲示する「札の辻」があり、街道の起点になっていました。

西南戦争後、この地には「四役戦死者弔魂之碑」などが建立され、乃木希典らによって周辺に庭園も整備されました。

この庭園は、一時荒廃しますが、新町の青壮年団により再整備され、第14代・知己が新たに「清爽園」と命名しています。



第十四代 知己



知己は明治十三年（一八八〇）十二月十二日、格の長男として生まれしました。文官高等試験に合格し、行政官として衆議院・山梨県・静岡県などに勤め、第八代熊本市長に就任しました。その後、関東庁事務官となり、大連民政署長を務めました。

略歴

明治三十七年（一九〇四） 旧制第五高等学校卒業
 同四十二年（一九〇九） 東京帝国大学法学部政治学科卒業
 文官高等試験合格
 同四十三年（一九一〇） 衆議院試補
 大正二年（一九一三） 衆議院書記官
 同四年（一九一五） 岩手県理事官
 同七年（一九一八） 山梨県警察部長
 同十年（一九二二） 静岡県警察部長
 同十一年（一九二二） 静岡県内務部長
 同十四年（一九二五） 熊本市長
 昭和四年（一九二九） 熊本市長辞任
 同五年（一九三〇） 関東庁事務官

昭和五年（一九三〇） 大連民政署長に就任

同七年（一九三二） 関東庁事務官を依願免官

同九年（一九三四） 社団法人帝国発明協会主事

同十一年（一九三六） 社団法人帝国発明協会専務理事

同会研究所総務部長

親子で熊本市長に

知己は市長として、市電第二期線の開通、市営バスの設置、熊本動物園の開園などを行い、都市機能を充実させました。

父格が力を尽くした山崎練兵場移転後、その跡地は新市街となり繁華街として発展していました。しかし、山崎練兵場移転後も、隣接する花畑藩邸跡には歩兵第二十三聯隊が駐屯していました。新市街の発展に伴い、その移転が問題となり、大正十三年（一九二四）に渡鹿練兵場への移転が行われました。

翌年に市長に就任した知己は跡地の整備を引き継ぎ、それまで行幸町を通っていた市役所―辛島町間の、市電路線の歩兵第二十三聯隊跡地に敷かれた新道への変更や、花畑公園設置などを行いました。

格と知己は、親子二代で新市街一帯の整備を行い、熊本市中心街の発展に貢献したといえます。

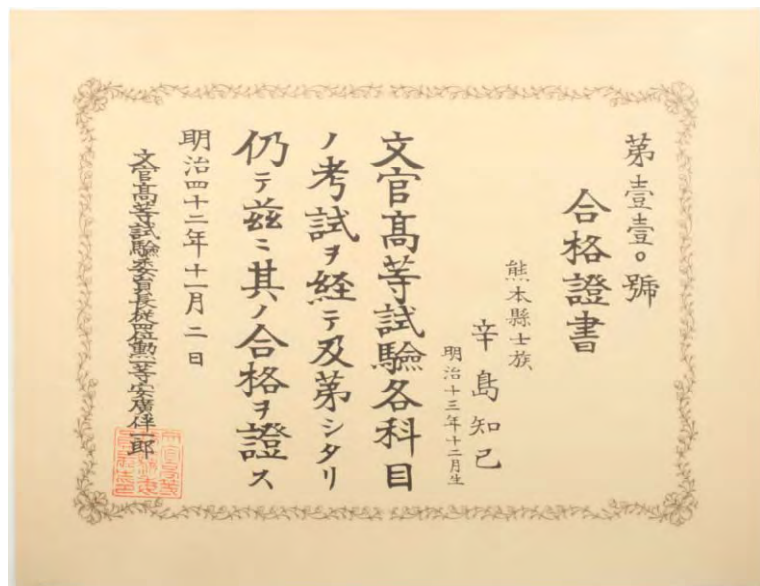
▲文官高等試験に合格

39 文官高等試験合格証書

明治四十二年（一九〇九）十一月二日

第十四代・知己^{ともき}は東京帝国大学法学部を卒業後、文官高等試験に合格して行政官となった。

文官高等試験は現在の国家公務員試験の前身で、行政官・外交官・司法官の試験が行われた。明治二十六年（一八九三）の文官任用令で確立したこの試験任用制度により、出自に関係なく官僚になることが可能となった。



▲静岡県内務部長を務める

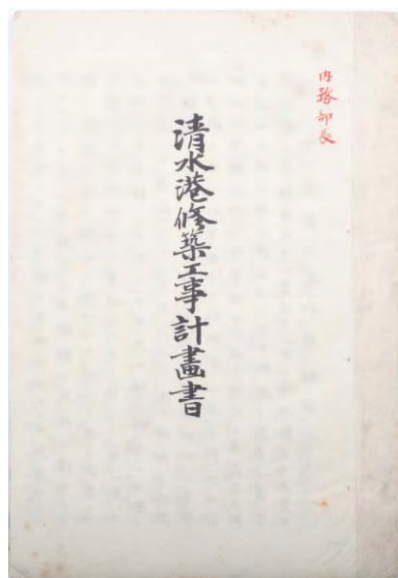
40 清水港修築工事計画書

大正八年（一九一九）頃

静岡県清水港の修築費予算や、過去の費用、利用状況などを記した行政資料。表紙に朱書で「内務部長」とある。

知己^{ともき}は大正十一年（一九二二）から十四年（一九二五）まで静岡県内務部長を務めた。

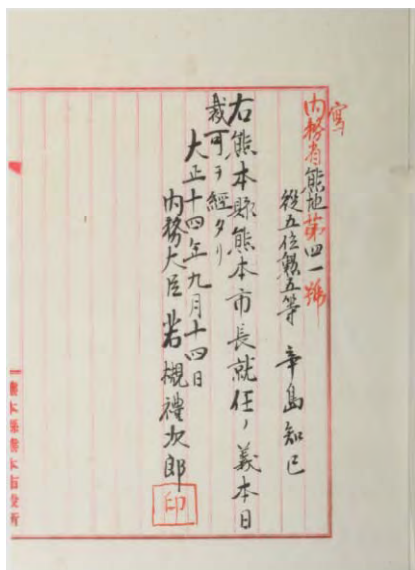
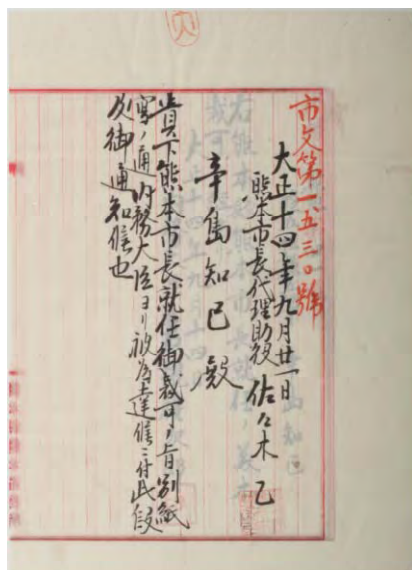
清水港は茶の輸出が盛んで、大正十二年（一九二三）の関東大震災後は復興用木材輸入の拠点となった。



▲第八代熊本市長に就任

41 辛島知己熊本市長任命通知書

大正十四年（一九二五）九月二十一日



大正十四年九月二十一日付で知己の熊本市長就任について裁可が下りたことを市から通知したものの。

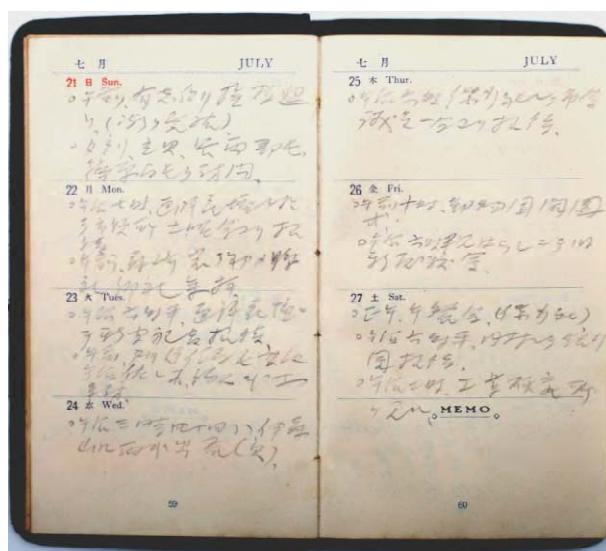
別紙として、九月十四日付で内務大臣・若槻禮次郎から出された裁可通知書の写を添付している。

知己は昭和四年（一九二九）七月まで熊本市長を務めた。

▲熊本市長時代の記事

42 日記

昭和四年（一九二九）



知己の熊本市長五年目の昭和四年の手帳。日々の記録やスケジュールなどを記す。この年の七月四日に市長を辞任した。

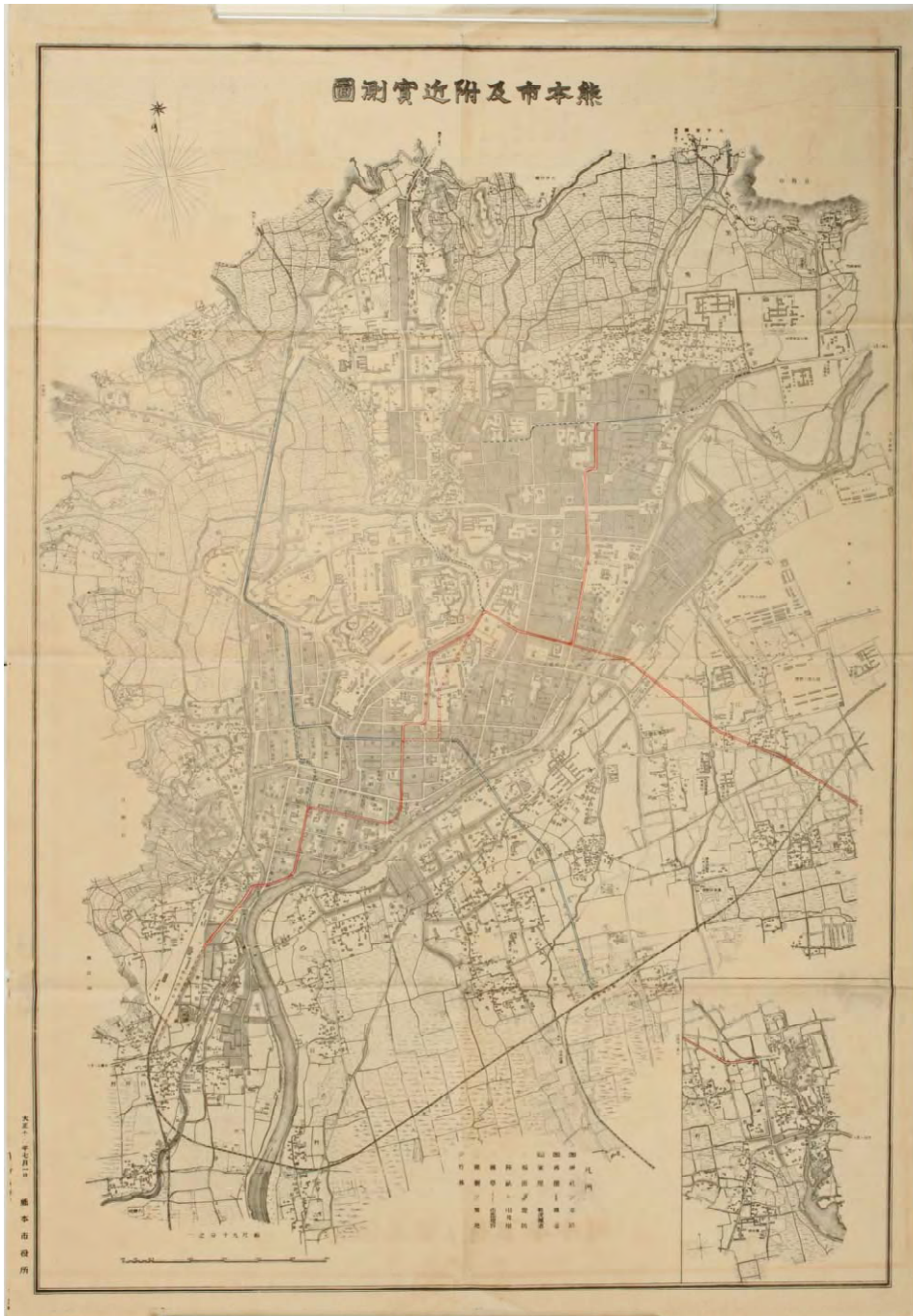
知己の在任中、水前寺に熊本動物園の設置が進められ、昭和四年七月二十六日に開園した。

手帳の当日欄には「午前十時、動物園開園式」と記されている。

▲熊本市に広がる市電

43 熊本市電線路図

大正時代末～昭和時代初期



熊本市電は大正十三年（一九二四）に、第一期線として熊本駅前から水道町を経由して浄行寺に至る幹線と、水道町から分岐し水前寺に至る支線が開通した。知己の市長在任中の昭和四年（一九二九）には第二期線が開通した。

本図では、第一期線の線路（朱線）に加え、第二期線として敷設された、辛島町から市役所間線路の歩兵第二十三聯隊跡新道への変更（朱点線）、黒髪線・上熊本線・春竹線（青線）の新設線路が示される。

（部分拡大）

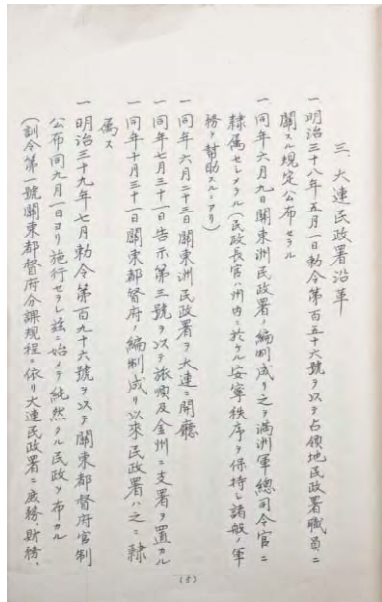
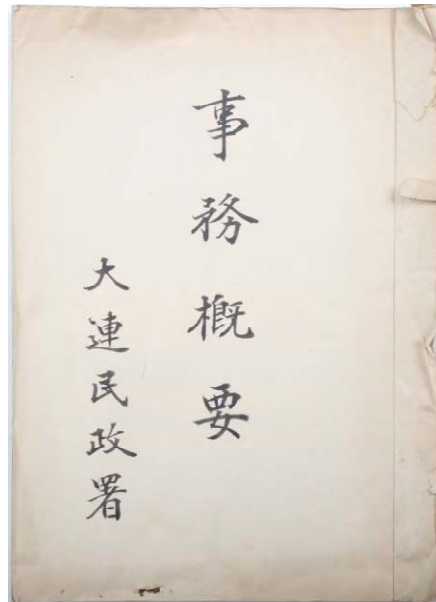
新設の辛島町―市役所間線路（朱点線）



▲大連民政署長となる

44 大連民政署事務概要

昭和六年（一九三一）



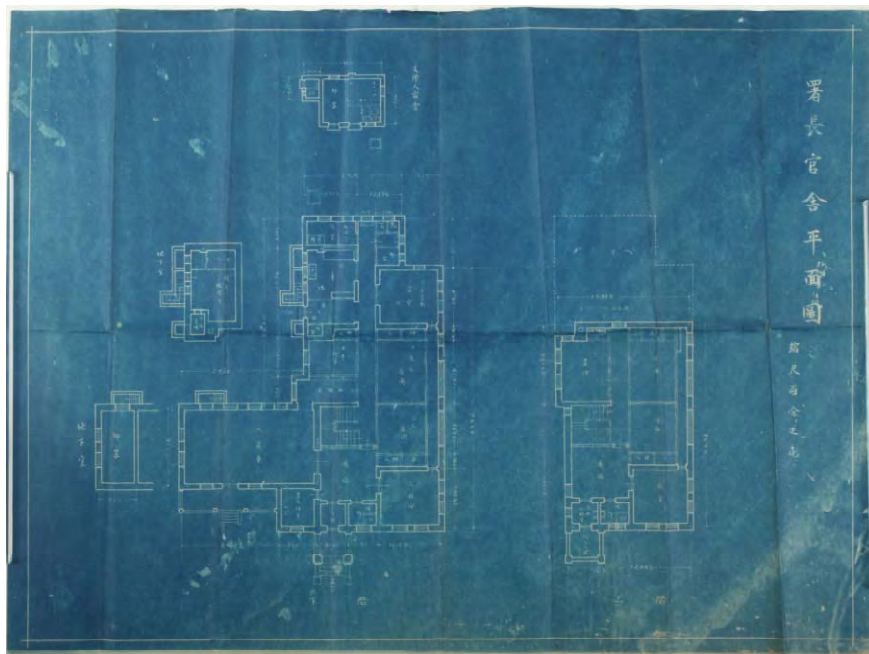
大連民政署の沿革や職員定員表など事務概要を記す。

知己は昭和五年（一九三〇）、関東庁事務官として大連民政署長となった。

関東庁は関東州（大連・旅順など、中国遼東半島における日本の租借地）の最高行政機関であり、大連民政署はその指揮下で行政事務を行った。

▲大連の建築物

45 署長官舎平面図



本図は、図面裏に「新築署長官舎平面図」と記される。縮尺は百分の一。二階建て地下に暖房機関室があり、居間やリノリウム敷の食堂などがある。

知己は昭和五年（一九三〇）に大連民政署長となり、家族で大連に渡った。

知己や娘の信子が居住した大連は近代建築が建ち並ぶ都市であった。

信子（知己の長女）

略歴

昭和十四年（一九三九） 津田英学塾（現津田塾大学）卒業

津田英学塾嘱託講師

同二十三年（一九四八） 熊本県立第一高等学校教諭

同五十三年（一九七八） 尚絅短期大学講師

熊本・東京・大連での生活

信子は、父知己の仕事の関係で、熊本、東京、大連とさまざまな地で学生生活を送りました。各地の学校の友人との手紙にはそれぞれの近況が伝えられ、昭和六年（一九三一）陸軍大演習の際に熊本の街が整備されてきれいになったこと、大連の学校行事で日本への内地見学旅行があり東京に行くことなど、当時の日々の生活の様子を窺い知ることができます。

英語の先生

信子は英語教諭として長年勤めました。学生のころから友人に「辛島さんは英語が得意」といわれています。第一高校では、「辛島先生はいつもニコニコしていて英語の時間が楽しい」と、英語が好きな生徒も多く、信子と同じように津田塾大学に進学する生徒も多くいたようです。

△第一高校の英語教諭

46 感謝状

昭和三十八年（一九六三）十月八日

感謝状

辛島信子殿

貴殿は昭和三年九月本校就任以来今日まで五年間専心職務に精励生徒の指導に尽瘁されましたその功績は誠に大なるものがありますここに創立六十周年記念式典を挙げるに当り記念品を贈って感謝の微意を表します

昭和三十八年十月八日

熊本県立第一高等学校長河添正

熊本県立第一高等学校の創立六十周年にあたり、信子の勤続十五年を表彰したものの。

信子は、昭和二十三年（一九四八）から同五十三年（一九七八）までの三十年、第一高校で英語教諭として勤務した。

自身も学生時代に一年間だけ同校（当時は第一高等女学校）で学び、その後大連に渡った。

第一高校退職後は尚絅短期大学で英語講師として勤務した。

こぼれ話③ ～辛島町と辛島公園～

熊本市長として第12代・格が^{いたる}尽力した山崎練兵場移転が成功し、その跡地は「征清記念碑」（上写真）や電話交換局などの建設地として売買されました。明治時代末期には、映画館などの建設も相次ぎ、繁華街の様相を呈します。

明治41年（1908）、一帯に新たな町名が設定されることになり、^{はなばたちよう}花畑町や^{れんべいちよう}練兵町とともに、格の功績を記念した^{からしまちよう}辛島町が誕生しました。

太平洋戦争後には、バラックが建ち並び、闇市が賑わいましたが、昭和34年（1959）に、この一帯を近代都市の中心部にふさわしい場所とするため、公園として整備されました。

公園の一角には、辛島格顕彰碑（下写真）が現在も残っています。



こぼれ話④ ～才蔵が命名した塾～

天保5年（1834）、熊本藩家老・^{こめだ これかた}米田是容は、衰退していた米田家の家塾を再建し、第8代・才蔵が「大学」の一節「学者必ず是に^{よつ}由て学べば、則ち其の^{たが}差はざるに^{ちか}庶からん」の語句を採用し、「^{ひつゆうどう}必由堂」と命名しました。

必由堂は文部大臣・^{いのうえこうし}井上毅らを輩出しており、現在は熊本市立必由館高等学校にその名を残し、校門横には「必由堂址」碑が残っています。